



新コラム From エイムズ 唯子 in Sedona, AZ

旅するキュイジーヌ

題字：小貴 絃子

第1回「そのポムじゃなかった！」の巻

「この世界の外部など、ほとんどどこにもないかのような行き詰まりを日々実感します」と、親しい友が手紙に綴ってくれたのは、2ヶ月ほど前のことです。感染者激減のニュースも聞かれるようになりましたが、わたしたちはこれから、この浅からぬ傷をどう癒していくのでしょうか。アメリカでは、保守派が巻き返しに躍起になっています。バイデン政権に対する冷たい視線は、彼のもとで希望を見だしてきた人々を狼狽させています。でも、まずは食べて、生きていきましょう。かつてのように自由に旅をすることはできなくても、思い出に翼をつけて、羽ばたかせましょう。旅先での食事をめぐる4回シリーズ、よろしければおつきあいください。

このごろは、分別くさく、通路側ばかりを選択するようになってしまいましたが、その時は、右肩の向こうに房総半島の灯りが見える窓際にわたしはいました。左となりには母。大学卒業を控えた22歳の冬、母の経営するファッション専門学校の学生一行の研修旅行に便乗してヨーロッパに連れて行ってもらったのですが、わたしは、喜ぶどころかふてくされてしまいました。ろくに口もきかずに機内食を早々に食べ終え、ウォークマンにヘッドフォンをつないで、モーツァルトのクラリネット協奏曲のカセットテープを、いったい何回聞いたでしょう。せっかく連れて来てあげたのに、その機嫌のわるさはなんなの、と母が最初はいぶかしげに、次第にいらいらしているのは、顔を見なくてもわかっていました。

「だいたい」と、お腹のなかで自己正当化。「どうせわたしなんて、おしゃれじゃないもの。『校長先生の娘さん、ダサ』って思われてるのがオチだ。

パリまで行って、そんなの、サイアク」。母率いる、小さくもファッションと名のついた学校の元集まった学生さんたちは、どうやったらそんなに不思議に可愛い洋服の着方ができるの、雑誌にも出ていないようなその組み合わせを、なぜ堂々と着て歩けるの？と、確信的にこちらを翻弄する、センス抜群の同世代の女性たち。要するに、いじけていたのです。

「おしゃれでは負けるけど、わたしは大学生だもんね。この旅行のためにアテネ・フランセで、フランス語だって勉強して来たんだから」という自負は、あのときのわたしを辛くも支えていました。ところがです。母とふたりで食事をするようになった自由行動の夜。地元の人たちでにぎわうブラッセリーの気さくな雰囲気、ほころんだ気持ちになっていたわたしは、おいしそうなメニューを発見して、さらに得意になっていました。「おかあさん、みて、ほらリンゴと豚肉の煮込みだって。おいしそうじゃないの、これにしたらどう？ポムってあるでしょ、これはリンゴよ。」パリでは、豚を果物と煮て食べるのね、としたり顔のわたしに、じゃあそれにするわ、と素直に従った母の前に出て来たお皿には、しかし、いくら探してもリンゴが入っていません。たしかに「ポム」とメニューにあったのに、注文を取るひとが間違えたのかしら、と実はつい最近まで思っていたのですが、コロナの自主隔離対策でフランス語をスマホのアプリであらためて習いはじめて、やっと30年前のナゾが解けました。メニューにあったのは、ポムはポムでも、ポムドテール、地中のりんご、つまり「ジャガイモ」！「おかあさん、リンゴじゃなくて、あとそれから、素直な娘じゃなくて、いろいろごめんね！」な、52歳の冬なのでした。